TOWER records
SHIBUYA SUPER STORE
10th ANNIVERSARY

WILHELM KEMPFF
- Ein Universalmusiker
1954 HIROSHIMA Konzertmitschnitt
Aufnahmen 1936-1964

•

Dietrich Fischer-Dieskau

Deutsche Grammophon

TOWER RECORDS VINTAGE COLLECTION No.6

ヴィルヘルム・ケンプといえば、一般的にクラシック音楽のピアニストとして知られているが、ほぼすべての音楽ジャンルにおいて作品を残した作曲家だったことを知る人はごく少ない。彼は2曲の交響曲をはじめ、数多くの宗教的・世俗的合唱曲、合唱つきのピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲、室内楽曲、ピアノ曲、そして3つのオペラを作曲している。また、数百曲におよぶ歌曲も書いており、ここではディートリヒ・フィッシャー=ディースカウが、コンラート・フェルディナント・マイヤーの詩による歌曲集から4曲選び出して歌っている。4曲は作曲家の対照的なふたつの作風をよく示すもので、〈諸人よ〉Alleと〈嵐の夜にて〉In einer Sturmnachtでは幻想的とさえいえる宗教的な世界が、〈歌心〉Liederseelenでは軽いタッチのロマンティックな世界がそれぞれ広がっていく。

ケンプ自身の言葉から

1 広島世界平和記念聖堂[1]のパイプオルガン除幕式にて語る

波乱にとんだ今の時代ですが、広島の平和記念聖堂にパイプオルガン[2]が作られる、と知った瞬間ほど感動したことはまれでした。パイプオルガンはよく「楽器の王様」と呼ばれます。確かに「王者」には違いありませんが、目には見えない「平和の王冠」をかぶった王様です。先祖代々そうしてきたように私もオルガンの前に座ると、何か神聖なものを感じて身が引き締まるのもそのためです。広島のパイプオルガンは、特別なオルガンです。1945年まで、瀬戸内海に面したごく普通の一都市だった広島の町は、今日、全人類の一致した願いを明快に表すひとつの象徴になっています。「平和への願い」の象徴です。広島と長崎に落ちた悪夢の光は、ひたすら進歩を続けた人類の現状を我々につきつけた、といえます。ヨハネ黙示録には、すでにこうした悲惨な光景が描かれています。まさに地獄、音楽的な表現をすれば「短調」の調性に対して存在するのが、天国のように純粋な「長調」の調性です。つまり、偉大な教会人［アルベルト・シュヴァイツァー］いわく「5人目の福音史家」ヨハン・セバスティアン・バッハの世界です。この福音史家の説法に人間言語は一切使われませんが、世界中の人が理解できます。平和の鐘の音を聞いたのち、この広島の平和記念聖堂のパイプオルガンで演奏できることを大変光栄に思っています。そして、信仰と祈りの言葉“Dona nobis pacem”〔(神よ）平和を与えたまえ〕を胸に、平和のために戦っている人たちの仲間入りをすることができて、幸せです。世界中の教会が鐘を鳴り響かせて、この“pax aeterna”(永遠の平和)

への呼びかけに答えてくれますように！

5「追想」

(1970年ヴィルヘルム・ケンプ75歳の誕生日での演説より――要約)

古くから続くオルガニスト一族の家庭に生まれたケンプは、父親の希望でオルガンの他にヴァイオリンの手ほどきも受けた。一族の才能を色濃く受け継いだこともあり、鍵盤楽器には類いまれな才能を発揮したケンプ青年だったが、ヴァイオリンは「相性が合わず」やめてしまった。身体と精神が調和した自然体であることの重要性、「ピアノがもっとも自然体の自分に合った楽器である」ことをさとったのはこうした経験をとおしてだった。ケンプが自分の演奏は独特であるが、「楽器の精神」にそったものであることを強調するのもうなずける。ピアニストは「やさしく」ピアノに接し、楽器を通して自分の魂を語らせなければならないが、決して「打楽器的な効果を得んがために乱暴に扱ってはならない」のである。

ロベルト・カーン（作曲）とハインリヒ・バルト（ピアノ）のもとで学び、優秀な成績をおさめたケンプは、(恩師ふたりの希望どおり）次の部門でメンデルスゾーン賞を受賞。ブラームスの《パガニーニのテーマによる変奏曲》とベートーヴェンの《ハンマークラヴィーア》ソナタの演奏でピアノ部門賞、そしてあるフーガのテーマをもとにした自由な即興創作で作曲部門賞に輝いた。この受賞をきっかけに、ケンプは世界へと羽ばたいていった。ピアニスト、オルガニストとして活躍するなかで、彼は作曲も続けていた。最初に書き上げた2曲の交響曲のうち2曲目は、1923年にヴィルヘルム・フルトヴェングラーの指揮でライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団によって初演され、続いて舞台音楽を4曲»Familie Gozzi«〔《ゴッツィー家》1934年〕»Die Fastnacht von Rottweil«〔《ロートヴァイルの断食の夜》1937年〕»König Midas«〔《ミダス王》1930年〕»Szenisches Mysterium von der Geburt des Herrn«〔《主イエス・キリスト降誕聖史劇》1925年〕作曲し、作品はドイツ各地の舞台で紹介された。《ゴッツィー家》などは、ナポリのサン・カルロ歌劇場でも4回上演されている。

7「ピアノとピアノ演奏について」(要約)

チェンバロとピアノで弾かれる音が伸びないことから、近代の「ノン（非）レガート」時代では、ベートーヴェンが盛んに追求していた響きの美しい演奏、いわゆる「モルト・カンタービレ（おおいに歌うような)」な演奏が姿を消していってしまった。現代音楽では、ピアニストにヴァイオリンのような、心から「エスプレッシーヴォ（感情たっぷりに)」な表現を求める作品はきわめて少ない。そうし

たことからピアニストには、愛するエウリディーチェを生きるものの世界へ呼び戻そうとするオルフェオのように、死に瀕した音を甦らせ、彩りを、ニュアンスを再び与えていく、という極めて困難な使命が与えられている。ヴィルヘルム・ケンプは自分の弟子たちに「オーケストラの真髄たるものを凝縮したような、もっとも崇高な楽器」であるピアノの鍵盤をひたすらたたくのではなく、16小節のフレーズを流れるように歌うことで、一音、一音のはかない命を忘れさせるように、と指導した。あとに続くショパンのノクターンの演奏で、ケンプは、いかにして「永遠の中に死んでいく」音を呼び覚ますのかを教えてくれる。

9「フェルッチョ・ブゾーニとの出会い」(要約)

ケンプは自伝『ツィンベルの星の下に』(1951年)の中で、ブゾーニとの出会いについて書いた部分を読み上げている。ドイツ語で書かれた原書のタイトルは、»Unter dem Zimbelstern«だが、オルガンのツィンベルシュテルン[3]をドイツ語のStern シュテルン、すなわち「星」にかけてつけられている。このツィンベルシュテルンの響きが生涯、彼の耳を離れなかった。

ケンプが父とともにベルリンのブゾーニ家を初めて訪れたのは1912年4月のことだったが、ハンブルクで行われたブゾーニ最後のオペラ《嫁選び》の初演を祝うお客でごったがえしており、全く話ができなかった。そこで、スウェーデン出身のブゾーニ夫人は、チャーミングな北欧訛りのドイツ語で次の週に来るように、と改めてふたりを招待してくれた(もっともこの時、ケンプ親子は、ブゾーニ家の怪しげなエキゾティックな風貌の召使を見て驚き、すでに言葉を失っていたので、好都合ではあった)。2度目の訪問のとき、ふたりにドアを開けてくれたのはブゾーニ本人だったが、家の中は前回とは打って変わって、修道院を思わせる厳粛な静けさだった。ブゾーニは、ケンプの演奏と作品を誉め称えると同時にいろいろと批判もし、バッハのコラールがなぜ、パイプオルガンよりもピアノで演奏されるほうが適当であるかを説明してくれた。

11「私のベートーヴェン演奏について」(要約)

ケンプはここで、自分の弾くベートーヴェンは「ベートーヴェンではなくてケンプだ」という彼のあまりにも個性的な演奏に対する批判に答えている。ベートーヴェンがどのように自分の作品を弾いていたのか、また今世紀以前にはどのように弾かれていたのか、そもそも我々は知るすべがないのだから、というのがケンプの反論である。ベートーヴェンの演奏に対しても、当時の批評によれば、賛否両論あり、ヨハン・ネポムック・フンメル風にフォルテが鋭すぎて、柔らかさに欠ける、と彼の演奏を嫌っていた者も少なくなかったらしい。リストの弟子だったハンス・フォン・ビューローの弟子、ハイリヒ・バルトに師事したケンプは、自分をそうしたベートーヴェン直系のピアニストである、と主張している。リストが師事したチェルニーは、ベートーヴェンの弟子だったからである。お話は今のピアニストに対する励ましの言葉で締めくくられている。「平和がこのまま続けば、いつか、神のおぼしめしにより花咲くことができた我々と同じ岸辺に立つことができるだろう」

注[1]　広島市の幟町カトリック教会内にある聖堂。原爆で破壊され、1950年から1954年にかけて、当時教会の司祭だったラ・サール神父の呼びかけで世界中から集められた寄付によって再建された。聖堂には当時の西ドイツから送られた4つの鐘があり、毎日3回、美しい音を響かせている。

注[2]　平和記念聖堂内にあるパイプオルガンは、1954年にドイツのケルン市より贈られたもので、パイプが3600本ある。

注[3]　Zimbelstern（ツィンベルシュテルン）は、パイプオルガンのストップの一種で、小さな鐘や鈴で縁取りした回転輪。通常の演奏にはほとんど使われない装飾的な音を出す。

訳、訳注：岡本和子